あなたの街は環境共生型都市ですか　？

2008 年 1 月 25 日
(株)グリーンファンド
メールマガジン第４号
バックナンバー＆送付のお断り連絡先：
http://www.greenfund.co.jp/merumaga.html#back-number

【１】2 つの異なる都市の類型

日本人の大多数は農村ではなく都市に住んでいる。従って我々が 21 世紀の環境共生型の社会を築く事を目標にすえて努力する意志があるのであれば、環境共生型の都市の姿がどうあるべきかを考える必要がある。そこで 2 つの異なる姿を持つ都市を考えてみよう。

まず A 市

① 昔栄えた中心商店街はやや衰退気味でシャッターを下ろした店舗が目立ち始めた。
② 代わって郊外の大型ショッピングモール、バイパス沿いに全国展開する各種の専門店、量販店チェーンの店舗が軒を連ねている。
③ 昔は街の郊外から中心地区へ向かってバス便が通い、老人、子供連れの主婦層の買い物客でにぎわった夕刻時の姿は薄れつつある。
④ 交通の便は中心商店街が寂れた影響でバスの便数が減り、公共交通機関の役割が低下し、代わって主に郊外に道路網が整備されたため、自家用車による交通が主力を占めるようになった。
⑤ 車を所有しない住民または運転できない老人を主な乗客対象として、市は赤字覚悟で都市の主要な施設を巡回する「コミュニティバス」を 1～2 時間に 1 本ほど運行し始めた。
⑥ 住宅街は人口が減少気味であるにもかかわらず世帯数が増加傾向にあるため、新興住宅地にマンションや戸建住宅が計画性もなく都市の郊外にスプロールし始めている。
⑦ それでも人口の絶対数が減少しているため地価は下落傾向であることに変わりはない。

次に B 市

① 中心商店街は買い物客でいつも活況を呈している。しかし店舗の建物自体への店名のサインボードは許されるが、街の美観を保つために通りに少しでも出るような看板やネオンサインは一切禁止されている。電柱の地中埋設化は完了している。

② 一方で郊外には大型のショッピングモールも 2、3 存在し、育ち盛りの子供を抱える主婦層は特売のチラシを見ながら食料品や衣料品のまとめ買いをして家計の助けにしている。中心商店街との間では取り扱う商品の棲み分けが行われている。

③ 市電とバスのサービス網が充実していて街の中心地区に乗客を運び、車を持たない層に対して中心商店街での買い物のアクセスを提供している。

④ 商品・重量物の搬入・搬出や、ごみ収集のためという例外を除けば都市の中心地区への車の乗り入れは禁止されている。

⑤ 郊外から車で中心商店街へ買い物に来る客は市街地に入る前のバス、市電の交差するミニターミナルに設けられた広い駐車場に自家用車を停め、約 5〜8 分間隔で運転される市電・バスに乗り換えなければならない。

⑥ 市交通局も乗客数を増やすために 1 ヶ月間市電・市バスの全路線に乗り放題の定期チケットを発行している。特に土・日は家族 5 人までが 1 枚の定期チケットで半径 50km 以内なら鉄道も含めて乗り放題である。

⑦ 街の中心には大きな広場と公園が設けられ、その周囲にはカフェやレストランがオープンテラスを作り、夕刻や週末は一杯やりながら語らう客で賑わう。

⑧ 毎週末、この広場では近郊の農家の農産物や代々家業として営む食品加工品店が持ち込んだ地方特産の食品を、住民や観光客向けに販売する青空市が立ち、季節ごとに青空コンサートやイベントも行われている。

【2】どちらの都市が住み良い街か？

Q　さて、地方選出の国会議員、地方議会の議員、地方の市役所職員、そして町興しに熱心な青年会議所・商工会議所の有力会員にお尋ねしたい。あなた自身は、そしてあなたに一票を投じた方、市の納税者、又はあなたの家業のお客様は、A 市と B 市のどちらに住んでみたいと感じるだろうか？

A　自家用愛車を運転し郊外をショッピングのためにドライブしなければ生き甲斐が感じられないという方を除けば、常識的には 10 人中 8 人は B 市を選ぶであろう。

それでは別の質問

Q　どちらの都市が住みよい都市だろうか？

Q　どちらの都市が化石燃料ベースのエネルギーの消費に依存しない、CO_2 をあまり排出しないライフスタイルを採用できる街であろうか？

Q　どちらの都市が全体的に老齢化しつつある国の都市住民にとって、また子供を育てる若い世代にとって住みやすい街であろうか？

Q　どちらの都市が近年失われてしまった住民間のコミュニティ意識を回復し、潤いのある生活ができるであろうか？

大多数の答えはやはり B 市であることは明白であろう。

それでは最後にお尋ねしたい。
Q　あなたの今住んでる町、出身地の街は A 市と B 市どちらに似ているであろうか。

大多数の方は残念ながら A 市と答えたであろう。

環境共生型の脱化石燃料社会の建設、中心商店街の活性化、都市の雇用と美観の維持、老齢化する住民にとって暮らしやすい街づくり、コミュニティ意識の回復などを目指すならば、そのモデルが A 市ではなく B 市であることはすでに明らかなのだ。にもかかわらず、東京、大阪などの大都市圏を除く日本のほとんどの都市は A 市のような車依存郊外スプロール都市の様相を益々強くしつつある。A 型都市の有力者の方々、B 型都市の建設は不可能であると断言しないで頂きたい。環境共生を目指す B 型都市は EU 諸国に沢山存在するのだから。日本からも地方議会の議員各位が多々公費で「行政視察」に訪れている。ただ、行政視察先での地元の市の関係者によるセミナーで居眠りをしているとこの行政視察のセミナーをドイツの現地でアレンジされている方が言われていた。また視察だけで実行が伴わないだけである。しかし、やればできないわけではない。すでに世の中にはそういう実例があるのだから。次回は特にドイツにその姿を紹介したい。（1997 字）

【３】懸賞付き質問
その前に読者の方々に賞金付きご質問をします。
下記の写真を見て日本の都市にあってドイツの都市に無いもの、逆に日本の都市になくてドイツの都市に有るものを 7 つ指摘してください。　全問正解者の中から抽選で若干名の方には、弊社が３月に企画する予定の韓国における大規模太陽光発電所の視察ツアーの往復航空券を進呈いたします。ふるってご応募ください。（回答の送り先：mailforms@greenfund.co.jp　既に弊社から個人的に回答を教えられた方の回答は無効です。　締め切り：次回のメルマガ発送日　（１--2 週間後）以内まで　）

©山内浩一 2005--2008 all rights reserved

山内浩一（ヤマウチコウイチ）
山一證券、モルガンスタンレー証券で金融商品の開発販売に従事した後、**再生可能エネルギー事業への投資会社、またその金融商品を開発するコンサンル会社(株)グリーンファンドを設立。**
www.greenfund.co.jp

写真解説：

１　ドイツで最も環境政策が進んでいる地方都市のひとつ　フライブルグ市　の中心街の姿　市電が走り車は乗り入れ禁止